

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：35411

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520449

研究課題名(和文) 乾隆期杭州詩人集団の活動とその詩風に関する研究

研究課題名(英文) The study about the Hangzhou poetsgroup's activity and poetaste at Qianlong priode

研究代表者

市瀬 信子 (ICHINOSE, NOBUKO)

福山平成大学・経営学部・教授

研究者番号：50176294

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円、(間接経費) 930,000円

研究成果の概要(和文)：乾隆時代に、無官のまま地方都市に移動して文学活動を行った杭州詩人集団について、具体的な活動と、彼らの詩風について考察を行った。その結果、それまで文学的には無名であった天津の地で、査氏の水西荘の元集った杭州詩人たちが、詩の唱和を中心に、地方誌の編纂、天津を詠じた詩の制作、各種編纂事業に参加し、天津文壇の活性化に貢献した実態を明らかにした。また、杭州詩人が参加した揚州詩壇の唱和集である『韓江雅集』と天津の『沽上題襟集』を比較し、その内容と浙派の詩風との関連について論じた。

研究成果の概要(英文)：We studied about the Hangzhou poetsgroup's concrete activity and thier poetaste. At that time, they moved to local city, also were active literary without official rank. As a consequence of our study,we could make prove, that in Tianjin, literary unsigned city, the Hangzhou poets came to Cha Weiren's salon Shuixi and contributed to activate the literary world of Tianjin, as leader of poemchanting, by editing of local magazine, by making of poem that composed Tianjin. We compared also Hanjiangyaji, th e chantingbook of Yangzhou poetscircle, which the Hangzhou poets joined in, with Gushangtijinji of Tianjin, and argued about relation of their contents and poetaste.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：3104

キーワード：中国文学

1. 研究開始当初の背景

(1) 国内においては、詩社や詩会についての研究としては、明代が主たる研究対象であり、清代に及ぶものがない。横田輝俊『明代詩文社の研究』(『中国近世文学評論史』汲水社、1990)は詩社研究の専著であるが、明代のみを論じる。他は、明末清初という時期に文学結社から政治結社へと変質していったことに注目した、社会史的観点からの研究が主であって文学的見地から論じるものはほとんどない。詩社のパトロンたる商人についての研究はあるが、客人たる詩人を論じるものがないのが現状であった。

(2) 国外においては、清代詩社に関わる研究となると、明末清初の文人集団に関しての論考は多数有るが、清代の文人集団の研究は少ない。清末に関するものはあっても、乾隆時代の文人集団の研究は少ない。劉尚恒『天津査氏水西荘研究文録』(天津社会科学院2008年)は、天津の蔵書家で、杭州詩人と詩会を繰り広げた査氏の研究であり、天津詩壇の状況を知る上で貴重な資料であるが、誤りも多い。揚州については、方盛良、卞孝萱らにパトロンたる徽商を論じた論考が幾つかあり、その中に客人であった詩人や唱和のことに触れている。しかし、杭州という視点で見ているものはなく、また詩風を論じる論考も未見である。

2. 研究の目的

本研究は、清朝乾隆期に、杭州・揚州・天津等を移動しつつ詩会活動を行った杭州詩人達にスポットをあて、各地での具体的な活動状況を明らかにするとともに、一地方の詩人群が各地に移動して詩会に参加するという特殊な現象の実態を明らかにするとともに、当時の詩壇に与えた影響について明らかにしようとするものである。

乾隆期の詩会での唱和詩は、後世作品として評価されず、研究対象とされることもなかった。そこで、一時の隆盛を極めた後、時代のあだ花のように消えていった杭州詩人を中心とする唱和詩から、乾隆期の見逃されてきた詩壇の一面に迫ろうというのが本研究の目的である。

とくに、彼らの活動の実態と共に作品についてはこれまで研究がないため、唱和集をとりあげてそこから唱和集制作の実態と詩風について、これまで顧みられなかった清代詩壇の新たな一面を明らかにするというのが、当該研究の目的である。

3. 研究の方法

(1) これまでの乾隆期杭州詩人集団に関する研究において、揚州における彼らの活躍を明らかにしてきたため、それと比較するものとして、同時期に杭州詩人が移動して詩会を開いたもう一つの地天津での詩会活動の詩会活動の実態を調査する。

(2) 杭州詩人が各地を転々とした理由がどこにあったのか、そこで作られた詩がどのようなものであったかを、作品集などの著作、

地方志、更に同時代の関係文献などから調査する。

(3) 彼らが各地の詩会でいかなる作品を作っていたのか、揚州と天津で杭州詩人とパトロンたちとの作品を収録した唱和詩集を読み解くことから明らかにしてゆく。またそこから、杭州詩人による浙派詩の特徴が、各地での詩会とどう関わっていたのかを考察する。

(4) 揚州と天津という2つの地方詩壇の唱和集を比較することで、地方と唱和集の特長がどのような関係にあるかを明らかにする。

4. 研究成果

(1) 『沽上題襟集』について

水西荘と『沽上題襟集』について。清朝乾隆時代に、地方都市で商人が主催する詩会が盛んになった。袁枚は、そうした年の代表として、揚州・天津・杭州を挙げる。このいずれの地でも、中心となったのは杭州詩人である。中でも天津は北京に近く、運輸交通の拠点としては知られるものの、文学の地としての歴史は持っていない。そこに乾隆年間、一時的に詩人が集い、詩壇隆盛の時代を迎えたのである。天津の詩壇の中心となったのは、塩商査為仁、査学礼兄弟であり、詩会は彼らの「水西荘」で開催された。『沽上題襟集』は水西荘での詩会の詩を収録したものである。『沽上題襟集』は、天津の文化史の一端を記すものであり、また詩会活動を知る上でも貴重な資料である。そこで、序文、詩人の構成、詩の内容から「沽上題襟集」とはどのようなものであるかをまず明らかにした。

『沽上題襟集』の版本について。『沽上題襟集』の版本は、現在2種が確認できる。一つは全八巻、巻頭に厲鶚の乾隆五年の序、張鵬翀の乾隆六年の序を付し、劉文煊、吳廷華、査為仁、汪沆、陳臯、万光泰、胡睿烈の8名の詩人の詩を各一巻ずつに収録したものである。一つは陳臯以下4人の詩を収め、巻頭に査学礼の序を付した四巻のものである。陳臯以下の四巻本は、収録された詩人の順序、詩の数、頁割など全て八巻本の後半と同じではあるが、収録された詩の詩句に文字の異同があること、また八巻本にはない査学礼の乾隆六年の序が陳臯の詩の前に付されていることから、先の厲鶚・張鵬翀序の八巻本の前半が欠けたものではないと判断できる。

『沽上題襟集』の構成は以下の通り。

()は本籍地を示す。

- 巻一 劉文煊(山陰) 附録: 胡忠楨(山陰) 童琦(山陰)
- 巻二 吳廷華(仁和) 附録: 余尚炳(天津) 趙昱(仁和) 惲源濬(陽湖)
- 巻三 査為仁(宛平) 附録: 査為義(宛平) 王霖(山陰) 杜甲(江都) 厲鶚(錢塘)
- 巻四 汪沆(錢塘) 附録: 厲鶚(錢塘) 葛正笏(崑山)
- 巻五 陳臯(錢塘) 附録: 陳章(錢塘) 李時馨(保定) 施安(錢塘)
- 巻六 万光泰(秀水) 附録: 周大樞(山陰)

朱岷（麻城）、余懋檣（諸暨）、万光謙（秀水）。

卷七 胡睿烈（天津。原籍山陰。）。附録：趙賢（錢塘）、凌洪仁（烏亭）。

卷八 查学礼（宛平）。附録：周焯（天津）、杭世駿（仁和）、張鳳孫（華亭）、李元（山陰）、申甫（江都）。

附録の詩は、巻一に2名3首、巻二に3名4首、巻三に4名7首、巻四に2名3首、巻五に3名3首、巻六に4名4首、巻七に2名2首、巻八に5名6首。厲鶚は2回登場している。附録に登場する詩人は計24名、詩は35首となる。主要詩人8名のうち、水西荘の主である查為仁、查学礼と天津の人である胡睿烈を除くと、遠方からの逗留客5名はいずれも浙江の人、胡睿烈ももと浙江山陰の人であることを考えると、客人6名が浙江人である。うち、杭州詩人は呉廷華、汪沆、陳臯の3名である。附録に登場する詩人の本籍地は、查氏一族を除くと、山陰5名、杭州6名と、やはり浙江の人が多い。とくに杭州に関しては、厲鶚が2度登場し、「沽上題襟集」に序をつけており、また陳臯も請われて天津を訪れていることなどから、水西荘と杭州とのつながりは特に深い。

『沽上題襟集』編纂時期と内容について。

『沽上題襟集』の序のうち、最も時期の遅いのが乾隆六年夏四月の查学礼の序であり、刊行はこれ以降。この序には、「庚申冬、同志八人津に在りての酬唱の作を取りて、年毎に数章を簡択し、各おの一巻と成す」とある。庚申は乾隆五年で、この時点で詩集が編纂される。しかし、この時点で天津を去っている同人も多く、実際には八人が同時に天津に居た時期は数ヶ月に過ぎない。また、查学礼については、同人が天津を訪れる以前の作も含んでおり、また詩の内容にしても、唱酬ではない、個人的な作を多く含むという特徴がある。しかし、この詩集は天津文化史上に大きな足跡を残し、文学作品としても、天津の歴史としても大きな意義を持つものである。

（2）天津における杭州詩人

乾隆時代の天津には、多くの客人が訪れたが、その中で杭州詩人に焦点をあて、どのような人物がこの地で活躍したのか、またいかなる文学活動を行ったのかをまとめる。

水西荘の杭州詩人達について。『沽上題襟集』以前には、南宋雜事詩に参加した符曾が乾隆元年、博学鴻試に推薦されて北京に赴き、その後、同じく杭州出身の汪沆らとともに水西荘に滞在。查学礼の詩集に唱和詩が収録され、また查為仁の詩集に序を寄せており、天津詩壇と深くつながっていた。

呉廷華は杭州出身の学者で、経学で知られるが、詩名は決して高くない。しかし水西荘では、高い評価を得たと『国朝杭郡詩輯』に記録があり、また『沽上題襟集』でも主要詩人として収録される。呉廷華は北京と天津で、博学鴻試で上京した杭州詩人たちとも唱和を繰り返している。

汪沆は、厲鶚の弟子であり、乾隆元年の博学鴻試に推挙され、選に漏れてそのまま天津水西荘に逗留する。詩会の他、「津門雜事詩」を撰し、詩名を知られる。呉廷華、汪沆はともに『天津府志』、『天津県志』を編纂し、天津文化の記録に尽くした。

陳臯は、兄の陳章とともに、二陳と称され、各地の詩壇で求められた詩人であり、兄は揚州の馬日瑄の韓江詩社に、弟である陳臯は乾隆四年に天津に来た。水西荘に滞在していた呉廷華、汪沆が同年北京に出たため、彼らと同時に水西荘にいたのは、わずか数ヶ月である。『沽上題襟集』の編纂は翌乾隆五年で、作品数が少なかった陳臯は、詩集に収録するため、強制的に詩を作らされたと告白している。その後、兄の居る揚州に移り住み、水西荘を後にした。呉廷華や汪沆と異なり、詩のみで名を残した人物である。

厲鶚は、杭州詩人の中で、最も名を知られ、各地の詩壇の領袖として人気を得た人物である。乾隆元年に博学鴻試のために上京するが、天津にはとどまらず、そのまま揚州の韓江詩社の客人となる。しかし、查為仁とは交友関係が続いており、『沽上題襟集』にも序を寄せている。水西荘を始めて訪れたのは乾隆十三年であり、数ヶ月鶴詠を楽しみ、查為仁とともに『絶妙好詞箋』を撰した。著名人厲鶚が滞在し、文学活動を行ったことで、『沽上題襟集』以後、天津詩壇は再び名を挙げることとなる。

杭世駿は、天津に長期間滞在したことはないが、北京で任官していた時、查氏と唱酬を繰り返した。直言が元で乾隆八年に罷免されて杭州に帰る途中、水西荘に立ち寄っている。罷免されてもなお乾隆帝に惜しまれたという人物であり、当時の名士であったため、滞在期間は短くとも、水西荘を代表する客人として必ずその名が挙がる。

杭州詩人の水西荘寄寓の背景について。原因の一つは、貧困である。多くの杭州詩人は無官であり、安定した収入を得ることができなかった。陳臯は、「貧しくして家食する能はず、遠く津門に走り、于斯堂查氏に主る」（「吾尽吾意齋詩序」）と、同郷の杭世駿が記している。また『沽上題襟集』附録に登場する杭州詩人余尚炳は、貧困のため水西荘に寄寓したと、汪沆「問畚集序」に記されている。汪沆も地位を得ることがなく、厲鶚も同様であった。塩商の元に客人となると、年俸が支給された。塩商に金銭面で援助を受け、そのサロンで大いに活躍し、サロンの名を挙げるのが彼らの重要な役割であった。

また塩商の豊富な蔵書も、杭州詩人が移動する理由の一つであった。天津でも查氏の蔵書に助けられ、地方誌の編纂他、様々な活動を行うことが可能であった。これもまた収入と名声に繋がるものであった。

もう一つの要因として、当時の杭州詩人の人気が挙げられる。呉敬梓の長編小説『儒林外史』は、同時代の作品であるが、杭州では

詩人の地位が高く、詩会の作品が詩集に載ること、官位にあるのと同様の名誉が得られる、と話す場面がある。唱酬の地杭州での名声が、詩会を開こうとする塩商に求められる要因となったのである。更に杭州の名声を高めたのが、杭州の詩社同人沈嘉轍、吳焯、陳芝光、符曾、趙昱、厲鶚、趙信によって雍正元年に作られた「南宋雜事詩」である。豊富な資料を用い、各人百首もしくは百一首を詠じ、詳細な注をつけた詩で南宋杭州を詠じたこの作品は、豊富な資料を用いた知的な作品であり、無官の詩人の詩社に対する認識を、趣味的な集まりから、時代をリードする文学創造集団へと改めさせた。この後、7名のうち4名が乾隆元年の博学鴻試に推薦されているのは、この詩の評価が高かったからであろう。厲鶚の弟子の汪沆が天津で「津門雜事詩」を、他郷の人間ながら作成したのも、南宋雜事詩の影響が大きい。

水西荘における、唱酬以外の杭州詩人の活動について。乾隆四年に刊行された『天津県志』、『天津府志』という地方誌の編纂に吳廷華、汪沆が携わった。両名は水西荘の蔵書を用いて同書を撰したとされ、総修吳廷華、分修汪沆と記されている。汪沆は杭州時代に『西湖志』、『浙江通志』を分修しており、南宋雜事詩とともに、杭州詩人の史才が認められてのことであった。汪沆はこの後『杭州府志』の主纂も務めることとなる。

汪沆は更に「津門雜事詩」を撰し、乾隆四年に水西荘で刊行された。これは地方誌編纂時の資料をもとに作られ、南宋雜事詩と同じ形式で作ったもので、杭州での先輩の仕事を引き継いだものである。この詩には吳廷華、鄭江、陳弘謀、杭世駿、查学礼が序を寄せており、これも天津を詠じた詩でありながら、杭州の影響が強いことをうかがわせる。

厲鶚は、水西荘主人查為仁とともに南宋周密の『絶妙好詞』に箋をつけて刊行した。これが『絶妙好詞箋』であり、杭州の汪沆、陳臯が校勘を担当した。これも杭州詩人が担った部分が大きい。

水西荘での刊行物に関して。水西荘では各種の出版事業が行われた。主だった刊行物には、いずれも杭州詩人の序がある。以下、水西荘の主だった刊行物を挙げる。アンダーラインは杭州人を示す。

『蔗塘未定稿』查為仁撰。厲鶚序。

『蓮坡詩話』查為仁撰。杭世駿序。

『游盤日記』查為仁撰。吳廷華、杭世駿序。

『無題詩』查為仁撰。查慎行序。陳臯題辭。

『抱甕集』查為仁撰。符曾序。

『押簾詞』查為仁撰。吳陳琰、汪沆、万光泰、陳臯題詞。

『山游集』查為仁撰。汪沆序。

『竹村花鳩集』查為仁撰。万光泰序。

『銅鼓書堂遺稿』查学礼撰。杭世駿序。

これらを見ると、水西荘の刊行物のほとんどに杭州人の序が付けられており、水西荘における杭州人の重要さがみてとれる。

以上の考察から、天津水西荘の最盛期を支えたのが、杭州詩人たちであったことがわかる。

(3)『沽上題襟集』と『韓江雅集』

杭州詩人が活躍した二つの地方詩社である、天津水西荘と揚州韓江詩社は、それぞれ唱和集を刊行している。それぞれの唱和集は、参加した詩人に浙江、とくに杭州詩人が多いこと、塩商が主催すること、同時代であることなど、共通点も多いが、詩集の編纂方法、収録された詩の傾向などには、それぞれ特徴があり、同時代の詩集とはいえず、全く異なる唱和集となっている。この相違がいかなるもので、どのような理由によるのかを考察することで、両地方詩壇の特長を明らかにすることができると考える。またその場で活躍した杭州詩人の詩風とはいかなるものであったかに迫る。

これらの唱和集に先行する、浙江での詩会の唱和集をまず比較材料としてみておく。一つは、元初の「月泉吟社」である。これは吳渭が「春日田園雜興」の詩題で浙江の詩社から懸賞付きで詩を募集し、三月三日に結果を発表した時の記録である。応募者 2735 名、うち 280 名を合格とし、上位 60 名までを順位をつけて紹介した一回の詩会の記録である。いわゆる「同題集詠」の代表的詩集であるが、一時的な号外のようなものとも言える。清代にこの詩集が注目されたのは、清初の王士禛が月泉吟社詩を取りあげて、自らの見識で並べ替えて発表したこと、厲鶚が『宋詩紀事』に、月泉吟社を大きく取りあげたことによる。こうした多人数による「同題集詠」が元以降の詩会の一つのスタイルとなった。

もう一つは元末明初の『草堂雅集』である。これは江蘇の商人顧阿瑛が自らの別荘である玉山草堂に多くの文人を集め、文人雅集の場として、十余年にわたって詩会を開いた時の記録である。商人ながら、文雅を理解し、文人を支援した顧阿瑛の名は、清代になって塩商が盛んに詩会を開催するようになると、盛んに持ち出され、顧阿瑛の如し、となぞらえられるようになる。

『草堂雅集』の特長は、「月泉吟社」と大きく異なり、詩人ごとに詩を収録し、小伝をつけたものである。詩題は不統一で、唱和詩とは考えにくい作品も含まれ、詩会での作品を集めたとは言いがたい。『四庫全書總目提要』には「草堂雅集を以て名と為すと雖も、実は其の人の平生の作を簡録す」とあり、詩会の成員の作品を集めたものではあるが、詩会の実態を伝えるものではないと指摘する。むしろ詩人の交流の記録といってよい。

清代の唱和集に目を転じると、天津の『沽上題襟集』は、『草堂雅集』型の詩集であって、詩会の詩とはいえない詩を多く含み、『草堂雅集』型の詩集である。以下、幾つかの点からその特徴をみる。

a 詩会の開催場所

主に水西荘であるが、「山游集」など、天

津郊外での作品も含む。他に、他地域との、おそらくは書簡でのやりとりの作を含む。

b 刊行時期と詩人の動向

詩集の編纂は乾隆五年である。詩人達の滞在時期は、以下の通り。

主人：查為仁 天津在住。

查学礼 天津在住。

客人：胡睿烈 天津在住。(原籍山陰)

劉文煊 乾隆元年以降、天津在住。

吳廷華 乾隆二～四年。

汪沆 乾隆元年～乾隆七年。

(乾隆四年に一度帰郷、五年再び来津。)

陳臯 乾隆四年～七年。

万光泰 乾隆元年～六、七年。

(乾隆四年に一度帰郷、同年再び来津。)

c 詩の制作時期

各詩人の別集(查為仁『蔗塘未定稿』、查学礼『銅鼓書堂遺稿』、万光泰『柘坡居士集』等)によって推測されるもの。

劉文煊：?～乾隆五年。

吳廷華：乾隆元年～四年。

查為仁：乾隆元年～乾隆五年。

汪沆：乾隆元年～五年。

陳臯：乾隆四年～五年。

万光泰：乾隆一・二年～乾隆五年。

胡睿烈：?～乾隆五年。

查学礼：雍正十二年～乾隆五年。

主な客人の滞在は乾隆元年に始まるが、查学礼の詩は雍正十二年からで、客人が来る以前の詩を含む。また陳臯は滞在期間が短いため、約1年間の詩のみとなる。

d 詩題

詩題については、唱酬の作の中に、天津の詩人同士の唱酬の他、天津以外の詩人との唱酬詩を多く含むのが特長である。「同題集詠」に多く用いられる古蹟、詠史などの題材はない。これは天津の歴史にも関係があると思われる。むしろ同時代の詩人の名が多く登場し、当時の詩人たちのつながりを知ることができるという上で貴重な資料といえる。

e 水西荘における他の唱和集との関わり

水西荘で刊行された唱和集の記録は、乾隆五十五年(1790)に查為仁が詠じた詩に、同年と、乾隆元年の二回にわたって唱和した詩を収録した『賞菊倡和詩』のみである。「月泉吟社」のように、詩会ごとの詩集を出版した記録はなく、『沽上題襟集』の下地となる唱和集はなかったと考えられる。

清代のもう一つの唱和集である、揚州の『韓江雅集』についてみると、「同題集詠」の形で十二巻にわたってまとめられており、順位こそつけないが、「月泉吟社」型の、詩会の様子をそのまま伝える唱和集である。

a 詩会の開催場所

馬氏の「小玲瓏山館」「行庵」の他、程夢星の「篠園」、陸鍾輝と張四科の「讓圃」等、塩商の庭園を転々として開催された。

b 刊行時期と詩人の動向

詩集編纂は、乾隆十三年以降。詩人は41名と多数で、長期滞在していた厲鶚、陳章の他

は塩商関係者が多くを占め、彼らはずっと揚州にいた。一時的な訪問者としては、乾隆八年に杭世駿が北京で罷免され、杭州に戻った年に限り、杭州詩会の代表的詩人のほとんどが参加した詩が見える。

参加者の分類は以下の通り。

A 韓江詩社の主催者

()は登場回数。[]は出身地。「」は詩会の実地。

馬日瑄(82)[徽州]揚州塩商。「行庵」「小玲瓏山館」。

馬日璐(90)[徽州]揚州塩商。馬日瑄の弟。「行庵」「小玲瓏山館」。

程夢星(67)[徽州]揚州塩商。「篠園」。

陸鍾輝(65)[揚州]官員外郎。「讓圃」。

張四科(65)[陝西]揚州塩商。「讓圃」。

方士庶(28)[徽州]揚州塩商。

方士(广+捷の右旁)(60)[徽州]揚州塩商。方士庶の弟。

汪玉樞(28)[徽州]揚州塩商。「九峰園」。

B 塩商関係者

張世進(21)[陝西]張四科の叔父。

洪振珂(17)[安徽]母親は馬氏。

方世拳(1)[桐城]程夢星の従兄。

C 揚州詩人

閔華(81)・胡期恒(46)・王藻(37)・劉師恕(4)・王文充(3)・高翔(2)・黃裕(1)・団昇(1)。

D 揚州馬氏宅寄寓詩人

陳章(92)[杭州]・厲鶚(55)[杭州]・全祖望(20)[寧波]・姚世鈺(20)[湖州]・陸錫疇(3)[蘇州]。

E 揚州僑居詩人

唐建中(28)[湖北]

F 地方からの客人

杭世駿(10)[杭州]・樓綺(7)[蘇州]・程士(木+咸)(3)[杭州?]18)・史肇鵬(1)[不明]・楊述曾(1)[鎮江]・鄭江(1)[杭州]・趙昱(1)[杭州]・丁敬(1)・趙信(1)[杭州]・趙一清(1)[杭州]・戴文燈(1)[湖州]・陳祖范(1)[蘇州]・查祥(1)[杭州]・張(火+曾)(1)[杭州]・鮑(金+診の右旁)(1)[漢軍正紅旗人]・釈明中(1)[杭州]・邵泰(1)[順天府]

D以下の客人では、本籍は杭州以外だが、杭州詩壇で活躍した詩人も多く、15名が杭州関係者である。客人の中で最も多かったのが杭州詩人であることがわかる。

c 詩の制作時期

最も早いものは、巻一の「金陵移梅歌」で、乾隆八年。最も遅いものは、巻十二に収録された『焦山紀遊集』の詩で、これは乾隆十三年の作である。よって乾隆八年から十三年の六年間に制作された詩を収録している。

d 詩題

「同題集詠」の詩集であり、分詠など、詩会の実態をそのまま伝えるものが多い。なかでも古蹟・詠史・詠物・詠骨董など、いわゆる浙派詩の特徴とされる詩を多く含む。

e 韓江詩社における他の唱和集との関わり

揚州では、詩会ごとに詩集が刊行されてお

り(『揚州画舫録』巻八) 韓江雅集はその記録をつなぎ合わせたものである。パトロンが多く、出版が頻繁だったために、こうした形式が可能であったと考えられる。

以上二つの唱和集の特長をみると、『沽上題襟集』の形態は、パトロンが少なく詩会の発行経験のない天津が詩人の交流を示すために編纂したものであり、『韓江雅集』は多くのパトロンによる複数回の詩会記録の刊行を経て、その集積として発行されたものという違いがある。詩題にしても、天津は文化的な歴史が浅く、詠史、詠古蹟の詩はなく、詩人同士の交流を示す詩題を特長としている。これは査為仁の『蓮坡詩話』が詩人の交流を中心としているのに通じる方針である。『韓江雅集』は、詠史、詠物などが多い。こうした詩は所謂浙派詩の特徴とも言われるが、浙派詩の特徴は、同時に「同題集詠」の特徴とも重なる点が多い。それに書籍による知識が加わった難解なものが、特に浙派らしいと言われるものである。浙派詩の特徴が詩会の形をそのまま伝える『韓江雅集』に多くみられるということは、杭州詩人が唱酬を盛んに行ったことと、浙派の詩風は関連するものであり、唱酬の場にふさわしい詩風が浙派詩だったと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4件)

市瀬信子、袁枚「子才子歌示莊念農」について、福山平成大学経営学部紀要『経営研究』、査読無、2012・3、第8号、pp.52-70

市瀬信子、『沽上題襟集』について、福山平成大学経営学部紀要『経営研究』、査読無、2013・3、第9号、pp.1-22

市瀬信子、天津水西荘における杭州詩人、『中国中世文学』、査読有、2013・10、第62号、pp.34-56

市瀬信子、『沽上題襟集』と『韓江雅集』、福山平成大学経営学部紀要『経営研究』、第10号、pp.15-32

[学会発表](計 3件)

市瀬信子、清代天津詩壇における杭州詩人、中国中世文学学会平成23年度研究大会、2011・10・22

市瀬信子、江戸後期の詩社にみえる、中国近世の詩社の影響、第3回「海域交流と中国古典小説」研究会(in台北)2013・9・6

市瀬信子、『沽上題襟集と韓江雅集』、中国中世文学学会平成25年度研究大会、2013・10・26

6. 研究組織

(1)研究代表者

市瀬 信子 (ICHINOSE NOBUKO)

福山平成大学・経営学部経営学科・教授

研究者番号:

50176294